

学生街を歩く ⑤

◆一橋大学と大学通り
(東京都国立市)

読売新聞記者 中西 茂

一橋大学のある東京郊外の国立は、おしゃれな街として知られる。今年は大が都心から移転して八〇周年になる。赤い三角屋根が特徴的だったJR中央線の旧国立駅舎は、保存運動のいかなく解体されてしまったが、駅から南にまっすぐ延びる大学通りの豊かな緑は健在だ。サクラやイチヨウの並木があり、四季折々に美しい姿を見せる。一橋大は、この通りをはさんだ東西にキャンパスがあり、大学を包み込むように街が広がる。高層マンションの建設を巡り、景観保全を求める住民らとの長い裁判もあった街だけに、学生だけでなく、住民にも人気のこだわりの店が多い。

「レ・アントルメ国立」は、大学通り沿いにある著名な洋菓子店だ。一橋大からの依頼で今年から、卒業式、入学式、ホームカミングデー、オープンキャンパスで、焼き菓子の販売を始めた。パウンドケーキやマドレーヌなどを専用の箱に詰め、大学のしおりを入れたものだ。今後はオリジナル商品も検討する。オーナーシェフの鮎沢信次さん(五二)は「大学通りの並木が年輪のイメージだからバームクーヘン

がいいかな」「大学のロゴが入ったオリジナルの菓子も考えてみたい」と積極的だ。

開店は一九九三年だが、鮎沢さんはフランスに修行に出る前の十代のころ、国立のステークハウスでアルバイトをしていた。国立とのつきあいは三〇年以上

だ。いまの店はアルバイトをした店のすぐ近くだという。まだ知名度が高くなかったころ、学内の情報誌に紹介してもらった縁もある。この秋には国立駅から南東方向に延びる旭通りに二号店を開き、国立との縁がますます深まった。食事もでき、お酒も飲めるカフェ「ロージナ茶房」は一九五四年開店。国立駅から徒歩一、二分の大学通りから少し入った路地にある。石原慎太郎都知事が一橋大生のころ通い、歌手の忌野清志郎さんも若いころよく訪れた。オーナーだった伊藤接さん(二〇〇三年、七七歳で死去)は



緑豊かな大学通りにあるレ・アントルメ (並木の奥)



ロージナ茶房の奥には半世紀を共に過ごした「邪宗門」もあったが・・・

もあるため、学生グループの利用も多い。最近は留学生も目立つ。「ロージナ」の隣には、やはり半世紀の歴史を刻んだ喫茶店「邪宗門」があったが、主人の死去で二年前に閉店した。「持ちつ持たれつ」の関係だったのに」と、「ロージナ」を切り盛りする接さんの次

画家でもあり、店はギャラリーを兼ねていた。以前はピアノもあって、作曲家の中村八丈さんや歌手の菅原洋一さんもピアノをひき歌ったとか。作家の山口瞳さんも常連だった。飾られた絵の中には山口さんの作品もある。

「ロージナ」はロシア語で「故郷、祖国、大地」。一橋大のロシア語の先生の命名だ。いまも文化人の出入りは多いが、一、二階と地下で計約百席



山口瞳さんの絵を示す伊藤文衛さん

男、文衛さん（四五）が残念がる。

国立には、「ロージナ」のザイカレー（ビーフカレー）など、学生を意識した大盛りメニューを持つ店も珍しくない。国立駅から南西方向に延びる富士見通り沿いにあるスタミナ飯店の看板メニュー「スタミナ丼」（ニンニク味の卵乗せ豚丼）は代表格だろう。ご飯が丼からこぼれんばかりの盛りで五五〇円。店には運動部の学生たちのメッセージであふれている。旭通りには「すた丼の店国立店」もある。学園祭「一橋祭」（今年は十一月五日〜七日）でもスタ丼の早食い競争が伝統になるほど、一橋大生にはおなじみのメニューだ。大学周辺では市民まつりや「天下市」と呼ばれる商業祭が開かれ、大学通りは歩行者天国になる。



「スタミナ早食い競争」の参加を呼びかける立て看板

国立にはまだチェーン店以外の喫茶店が点在する。また、チェーンのファミリレストラン、喫茶店、ファストフード店もほほそろつていて、街の集客力の高さを示す。例えば大学通りに面したドールコーヒーは三階建てだ。ただし、眺めのいい三階は喫煙席。喫茶店文化が健在の街は、喫煙者の存在も十分に認められている街でもあるようだ。